音楽科

教科領域別研究テーマ

【一人一人が自分自身の力で
多様な音楽を楽しむことのできる生徒の育成
ー音楽的な見方・考え方を働かせ，学びの深まりが
実感できる指導法の工夫（小中連携）ー】



一人一人が自分自身の力で多様な音楽を楽しむことのできる生徒の育成

—音楽的な見方・考え方を働かせ，学びの深まりが実感できる指導法の工夫（小中連携）—

実践者　三棟　優子
愛媛大学研究パートナー　井上　洋一，楠　俊明

第１章　はじめに

研究テーマ設定の理由

音楽には計り知れない力が秘められている。今日のような予測不能な事態に直面したときに，音楽は私たちの気持ちを強くしたり，前向きに取り組む力を与えてくれたりするかけがえのないものとなる。音楽科の学習においては，音楽的な見方・考え方を働かせ，生活や社会の中の音や音楽，音楽文化と豊かに関わる資質・能力を育成することを目指している。その資質・能力は，その後の長い人生において生きて働き，人生を豊かにしてくれるものであり，音楽は幸せになるために絶対に必要なものであると考えている。

そこで，音楽科では持続可能な社会の実現に貢献する実践者の姿を，一人一人が自分自身の力で多様な音楽を楽しむことのできる生徒の姿と設定した。中学校卒業後，子どもたちが世界中のあふれるほどの多様な音楽と出合った時に，自分の力で存分に味わえることのできる力を身に付け，音楽や音楽文化を尊重し，創造・継承・発展させ，持続可能なものにする文化を創造する担い手となってほしいという思いからである。

今年度は，小学校から中学校，そして高等学校への連続性・系統性を考えた授業づくりを大切にしたい。より感動のある授業を目指すために小・中学校それぞれの良さを学習方法に取り入れ，知覚と感受が結び付いた授業を行えば，学習に対して意欲的に取り組んだり，学習内容に対して深く考えたりする子どもたちの姿を多く見られると考える。また，音楽的な見方・考え方を働かせることによって，音楽を客観的側面や感性的側面から捉えることができたり，自分や社会にとっての音楽の意味を考えたりすることができる。子どもたちが小学校から中学校に向けて，音楽への思いをつなげ，深める過程で，音楽的な学びを確かな力とし，音楽的にも人間的にも豊かになるのではないかと考え，上記研究テーマを設定した。

第２章　研究の実際

１　研究の内容及び方法

(1)　深い学びを実現するためのカリキュラムマネジメントの工夫

小学校と中学校の学習内容では，共通している教材が多く含まれている。同じ教材でもねらいを変えることにより，生徒は新たな視点を持ち，多様な音楽を楽しむことにつながると考える。そこで，小学校で何を学んでいるのか，実態を把握し，系統性のある学習を進め，小・中の連携を考えた題材構成を工夫する。

(2)　音楽科の特質に応じた言語活動による対話的な学びの充実

音楽科の学びは，音楽をすること，つまり体を通した学びがその特質である。したがって，言語活動は，このことをベースに言語以外の方法も取り入れ，適切に行われる必要がある。授業では，自身の思いや意図を実際に歌って伝え合ったり，表現の工夫をオノマトペなどで音楽的に表したり，捉えたことを何かに例えたり，置き換えたりするなどし，音楽科の特質

に応じた言語活動を工夫し，表現力の育成につなげたい。そして，音楽を形づくっている要素や要素同士の関連を知覚し，音楽活動と言語活動の往還を図りながら，主体的・対話的に学ぶ学習を展開していく。

(3) 自らの学びを自覚し，次につなげる振り返り活動の充実

毎時間の終末では，実際に学んだことを生かして「歌う」「演奏する」「聴く」等の振り返り活動を行い，学びの達成感・有用感を味わわせる。また，学習アプリのアンケート機能を用いて，教師自身が授業改善に使ったり，生徒の学びを自覚化させたりできる振り返りを実施する。

2 研究の実際

(1) 指導の実際

ア 題材名 リズムアンサンブルを楽しもう！（第１学年）

教材 Hit the Beat「ミッキーマウス・マーチ」初級編・中級編
「クラッピングミュージック」「レッツゴーのリズム」（小学校５年教科書）
「クラッピング・カルテット第１番」（高校教科書）

イ 題材の目標

○音素材の特徴及び音の重なり方や構成上の特徴と表したいイメージとの関わりについて理解するとともに，創意工夫を生かした表現で音楽をつくるために必要な，課題や条件に沿った音の選択や組合せなどの技能を身に付けることができる。 「知識及び技能」

○音色，リズム，強弱，構成を知覚し，それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感受しながら，知覚したことと感受したこととの関わりについて考え，どのように演奏するか，また，音楽をつくるかについて思いや意図をもつことができる。「思考力，判断力，表現力等」

○音色，リズム，強弱，構成の違いによって生み出される雰囲気や表情などの変化に関心をもち，音楽活動を楽しみながら主体的・協働的に器楽や創作の学習活動に取り組むとともに，音楽に対する感性を豊かにしようとする。 「学びに向かう力，人間性等」

ウ 重点目標

＜本質的な問い＞

楽器や歌がなくても，アンサンブルを楽しむにはどうすればよいか。

＜永続的な理解＞

楽器や歌がなくても，アンサンブルを楽しむには，音楽の要素であるリズムを用いるとよい。西洋音楽やその影響を受けた音楽では，音楽を形づくる基本的要素として，メロディ，ハーモニー，リズムがある。これらは音楽の三要素と言われており，多くの音楽ではこれら３要素がすべて備わっている。ただし，リズムのみで表現された音楽も存在する。リズムアンサンブルは，自分たちの身体を楽器として捉え，足踏みや手拍子でリズム音楽をつくることにより，仲間と一体感を味わいながら色々な音色やリズムを表現して楽しむことができる。

エ パフォーマンス課題とルーブリック

パフォーマンス課題
４人グループで，今まで学んできた音楽の仕組みを使ってオリジナルのリズムアンサンブルを作りましょう。アンサンブルをつくる際の課題や条件は以下の通りです。 ①イメージについては「時間の経過とともに，どのように変わっていくか」ということを基に考える。 ②表したいイメージと関わらせながら，４分の４拍子，16 小節の二声以上のアンサンブルの音楽をつくる。 ③表したいイメージに合う音素材を使う。

	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
A	音素材や音の重なり方の使い方が多様であり，かつ，表したいイメージとつくった音楽との関連についての説明と作品とが整合している。	音色，リズム，強弱，構成を知覚し，それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感受しながら，知覚したことと感受したこととの関わりについて考え，どのように演奏するか，どのように音楽をつくるかについて思いや意図をもっている。	Bに加え，課題を解決するめに仲間と共に積極的に話し合い，よりよい考えに辿り着こうとしている。また，振り返りでは良かった点やできなかった点だけでなく，改善点や次への見通しなどを適切に書いている。
B	音楽をつくる際の課題や条件に沿って，表したいイメージと関わらせて捉えた音素材や音の重なり方の特徴を書き，その音楽をリズム譜に書き表している。	音色，リズム，強弱，構成を知覚し，それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感受しながら，どのように音楽をつくるかについて思いや意図をもっている。	音色，リズム，強弱，構成の違いによる音楽が生み出す雰囲気や表情などの変化に関心をもち，工夫している。
C	課題や条件に沿った音楽がつくれていない。	感受したことと知覚したことの関わりが不十分で，表したいイメージにどのように音楽をつくるかについて思いや意図をもっていない。	自分の思いや意図を言葉で表し，その課題解決に向けて仲間と積極的に話し合うことができない。

(2) 授業の実際（2/5時間）

ア 主題

クラッピング・カルテット第1番の音楽の仕組みを見つけよう。

イ ねらい

音色，リズム，強弱，構成を知覚し，それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感受しながら，知覚したことと感受したこととの関わりについて考え，どのように音楽をつくるかについて思いや意図をもつことができる。

ウ 展開

学習活動（形態）	時間	○教師の働きかけ ・生徒の反応	○指導の工夫 ◎評価規準（評価方法）
1 前時の復習をした。(一斉)	5	○今まで取り組んできたリズムアンサンブルの復習をしよう。	○ピアノ伴奏や模範演奏は iPad のアプリで制作した。
2 学習課題を提示した。 (一斉)	5	クラッピング・カルテット第1番の音楽の仕組みを見つけよう。 ○どういう視点で練習をすれば，音楽の仕組みが見つかるかな？ ・他のパートの音をよく聴くといい。 ・楽譜をよく見て演奏する。	○見通しを持たせて練習させるために，視点を考えさせた。
3 パート練習後，合奏した。 (小集団→全体)	15	○クラッピング・カルテット第1番を正確に演奏できるように，各パートに分かれて練習しよう。	
4 音楽の仕組みを見つけた。 個人 小集団 全体	15	○クラッピング・カルテット第1番にはどんな仕組みがあるかな？ ・A～Dは1パートずつ増えるので，音量がUPしている。異なるリズムを合わせると休符の位置が違っていて，新たなリズムが生まれる。 ・1パート対3パートになっているところはかけ合いになっていておもしろい。 ・Fは2パート対2パートになっている。 ・Hはずらして演奏するようになっている。八分音符がずっと繋がっている感じに聞こえる。 ・同じリズム・パターンがある。	◎リズム，強弱，構成，音の重なりなどを知覚し，それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感受しながら，知覚したことと感受したこととの関わりについて考えている。 （発表，ワークシート） ○言葉で表したことと音や音楽との関わりが捉えられるように，音によるコミュニケ

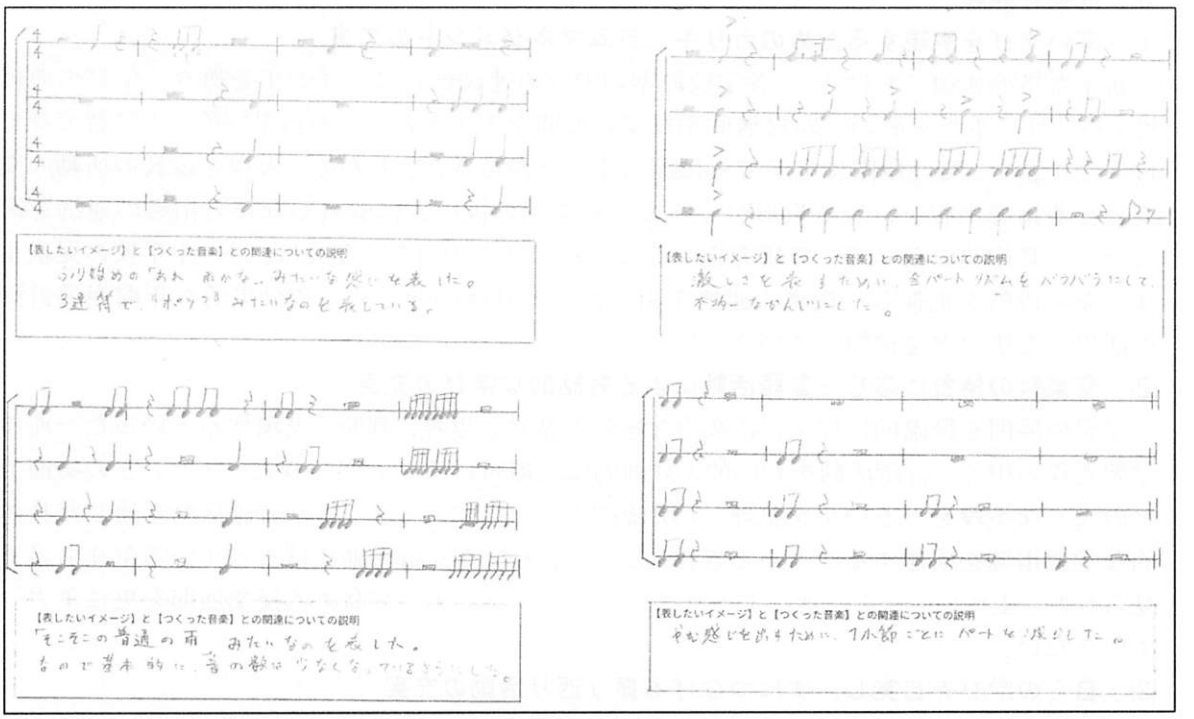
		・最後をみんなが一緒に演奏すると統一感が出る。	ーションを大切にするよう促した。
5　パフォーマンス課題のイメージを話し合った。 （小集団）	7	○パフォーマンス課題の表したいイメージを考えよう。 ・朝のバトル（起床から登校） ・喜怒哀楽 ・人の一生 ・料理開始から完成まで	◎条件に合うリズムアンサンブルで表したいイメージが考えられているか。 （ワークシート）
6　本時の学習を振り返った。 （個人）	3	○今日の活動を通しての振り返りと次時への目標をロイロノートで提出しよう。	○次時の課題につながるように，ロイロノートを用いて，本時の学習活動を振り返らせた。

(3)　生徒の学びの実際

振り返りで生徒が記述した主なもの（**資料１**），本実践の作品例（**資料２**）は次のとおりである。

【クラッピング・カルテット第１番を演奏しておもしろいと感じたところは？】
○四つのパートが違うリズムを叩いているので，合った時の達成感！
○様々なリズムが合わさって，新しいリズムが生まれるところ。
○手拍子だけできちんと音楽になっているところ。
○一つ一つのリズムは単純だがそれらが重なり合って複雑なリズムをつくり出しているところ。
○ちょっとしたズレや音の強弱で色々なことを連想できるところ。
【どんなことに気を付けたら音楽の仕組みを見付けることができたか？】
○他のパートをよく聴く。
○楽譜をよく見て，音楽記号に注目する。
○音の重なり方に注目する。
○他のパートとのバランスに気を付ける。
【今まで学習した音楽の仕組みの中で，自分たちの作品づくりに生かしたいことは？】
○身体の様々な部分を使った音色の変化･･･50 人
○人数の変化による強弱の変化･･･84 人
○音楽記号を楽譜上に記載し，みんなで表現する･･･32 人
○同じリズムパターンでもズレによる面白さ･･･74 人
○声部の組合せの変化･･･54 人
【４人グループでリズムアンサンブルを創った活動を通して，学んだことは？】
○仲間と共にリズムをつくることの楽しさや多様な考えを組み合わせることでたくさんのリズムが生まれることが分かった。
○表したいものを考えるのは難しく感じたと同時に，音楽を創る楽しさを感じた。表したいものを思い浮かべることはできても，どんな音？どんなリズム？という部分で行き詰まることがあったので，想像力を働かせ，よりよいオリジナル音楽を創れたらいいなと思った。
○みんなでリズムのかけ合いをする楽しさを知ることができた。ひざ，手，足など叩く場所によって音の高さ，長さ，響きが変わって面白いと思った。
○班のみんなで，身体からつくり上げられる音に面白みを感じた。強弱やリズム，テンポにもこだわり，テーマに合うようなリズムアンサンブルを作成して，チームワークの楽しさを感じることもできた。また，身体で音やリズムをつくり，曲想をイメージできるところが面白いと思った。
【小学校での音楽づくりとのつながりで感じたことは？】
○小学校の時と使用する音符や休符が一緒でも，クラッピング・カルテットで使われていた音楽の仕組みを使ってオリジナルのリズム創作をすると色々な工夫ができて楽しかった。
○小学校の時は，一からリズムを作ることはなかった。初めから自分たちの表したいイメージをもとに班のみんなと相談してリズム創作をすることで，達成感を味わうことができた。

資料１　振り返りで生徒が記述した主なもの



資料２　パフォーマンス課題と生徒作品　タイトル「雨」

４人グループでパフォーマンス課題に取り組ませたが，どうしても個人差が出てしまい，創作の部分においては，一人一人の見取りが難しかった。また，創作したリズムを実際に演奏させるまでに想定以上の時間がかかった。そこで，グループ発表が終わった後に，個人に８小節の二声のリズムアンサンブルを作る課題を出した。１拍に当てはまる音符や休符を例として示したところ，ほとんどの生徒が自分の力で作品を仕上げることができた。生徒の作品は（**資料３**）のとおりである。



資料３　改訂パフォーマンス課題と生徒作品　タイトル「肝試し」

3　成果と課題

(1)　深い学びを実現するためのカリキュラムマネジメントの工夫

新学習指導要領における，「各学校段階の内容の連続性」にポイントを置き，学びの連続性・系統性に重点を置いた題材構成や授業の展開を工夫した。その結果，音楽の学習で身に付けたことを，発達段階に応じて更に深めることができた。しかし，表現と鑑賞の活動の支えとなる指導内容を，音楽を形づくっている要素の扱い方に着目しながら指導の連携を図るための具体的な手立てまで研究をすることができなかった。今後は，小・中学校の児童生徒の発達段階を把握し，指導の連携を図るための具体的な手立てや効果的な年間指導計画の活用の方法などを検討していきたい。

(2)　音楽科の特質に応じた言語活動による対話的な学びの充実

学習の展開を段階的に捉え，音楽的な感受を基に，思考，判断，表現するといった一連の学習過程の中で，言語活動を意図的・計画的に位置付けることができた。また，どの場面でどのような手段をとるのかを整理し，明確にすることによって，より言語活動を通した具体的な学習指導を構想することができた。しかし，単なる言語活動に留まっている生徒も多く見られた。生徒の「音と言葉によるコミュニケーション力」を高める授業展開を更に工夫していきたい。

(3)　自らの学びを自覚し，次につなげる振り返り活動の充実

本題材において，毎時間の振り返り活動を学習アプリのアンケート機能を用いて行った。しかし，生徒自身が自分の学びの深まりを実感するには至っていなかった。学んだことの意味や価値を自覚できるようになるためには，学習履歴を書き残させる方法がよいと考え，一枚ポートフォリオを作成し，毎時間記述内容についてコメントをしたり，生徒の学びの状況を把握して個別の支援に役立てたりするなど，現在も検討を重ねている。

第３章　おわりに

音楽科では，持続可能な社会の実現に貢献する実践者の姿を，一人一人が自分自身の力で多様な音楽を楽しむことのできる生徒の姿として，その育成に向けて研究を行ってきた。そして，指導内容の関連性を考えた小中連携のカリキュラムを通して，音楽的な見方・考え方を働かせ，学びの深まりが実感できる指導法を工夫することができた。今後は，附属小学校や公立小学校とも連携を取り，指導の連携を図るための具体的な手立てや効果的な年間指導計画の活用の方法など，研鑽に努めていきたい。

参考文献

・「音楽のおくりもの　５」教育出版
・「高校生の音楽①」教育芸術社
・「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料　国立教育政策研究所教育課程研究センター
・西岡加名恵(2016)「『資質・能力』を育てるパフォーマンス評価　アクティブ・ラーニングをどう充実させるか」明治図書
・西岡加名恵，石井英真(2019)「教科の『深い学び』を表現するパフォーマンス評価」日本標準
・岩宮眞一郎(2020)「図解入門　よくわかる最新　音楽の仕組みと科学」　秀和システム